

て「騙せず、詭遇して禽を得るは、射者御者だにこれを爲すと恥ずる。況んや君子に於てをや。

君子は如何に道を行ふの志切なりとも、決して法を破り道を枉ぐるが如きことを爲さない、假令尋を直うするも尺を枉ぐるはこれ既に義を破つたもの、否未だ己れを枉げて能く人を直うするものは無い。其の義に非ず其の道に非ずば、これを祿するに天下を以つてすとも願はず、擊馬千駟も視ざる也。其の義に非ず其の道に非ずは、一介を以つて人に與へず、一介も以つて人に取らず。大人君子は、「言、信を必とせず、行果を必とせず」。吾人は結果實效の有無如何は差措きて、唯だ義のある所のみ就かねばならぬ。君子は「其の義を正して其の利を謀らず、其の道を明かにして、其の效を計らず」と此れ等の思想によつて考ふれば、孟子は謂ふ所の義を以つて、他の何等の理由根據に由らずして、其れ自ら直覺的に絶對的に毫一の假借なく、吾人に實行を強ゆる道德上の法則、若しくは義務と見做したのである。義の爲めには一寸も己を枉げずと云ふ此の所信と思想とは「孟子」一巻の中に最も力強く吾人に響き來る光彩ある部分である。(春秋倫理想史)

四、仁義の必要及び效果 仁義は既に述べた如く、道德の根本原理である、須臾も離るべからざる道である。故に其の必要及效果の偉大なることは言ふ迄もない。随つて眞の王者たらんとするものの體得すべき根本精神である。故にそのことは「孟子」の隨處に見出すことが出来る。即ち義を後にして利を先きにするれば人は奪掠せなければ飽きや

らない。上下交々利を取れば則ち國は滅亡すると言つてをる。「王何ぞ必ずしも利を言はむ、亦仁義あるのみ」と言つた語は孟子が梁の惠王に對へた言葉であるが、以て仁義の重要なることが解る。則ち「孟子見梁惠王、王曰、叟不遠千里而來、亦將有以利吾國乎、孟子對曰、王何必曰利、亦有仁義而已矣、云々」(梁惠王篇上)又「孟子曰、以力假仁者霸、霸必有國、以德行仁者王、王不待大、湯以七十里、文王以百里、以力服人者、非心服也、力不膽也、以德服人者、中心悅而誠服也、如七十子之服孔子也」(公孫丑篇上)と言つて王たらんものは仁政によつて民を心服せしめねばならぬ、力を以つて仁を假るの覇者排撃してをる。更に仁義の必要を論じて「前略、爲人臣者、懷仁義以事其君、爲人子者、懷仁義以事其父、爲人弟者、懷仁義以事其兄、是君臣父子兄弟、去利懷仁義、以相接也、然而不王者、未之有也、何必曰利、」(告子篇下)又「今天下之君、有好仁者、則諸侯皆爲之敵矣、雖欲無王、不可得己」(離婁篇上)と。

又仁人には敵なく、仁の不仁に勝つは猶水の火に勝つが如くである。故、仁なれば榮へ、不仁なれば辱めらると到る所に其の價值と効果を論じてをる。則ち、「仁人無敵於天下、以_二至仁_一伐_二至不仁_一、而何其血之流_レ杵也」(盡心篇下)「孟子曰、仁之勝_二不仁_一也、猶_二水勝_レ火_一、今之爲_レ仁者、猶_二以_一一杯水_一救_二一車薪之火_一也、不_レ熄則謂_二之水不_レ勝_レ火_一、此又與_二於不仁_一之甚者也、亦終必亡而已矣、」(告子篇上)「孟子曰、仁則榮、不仁則辱、今惡_レ辱而居_二不仁_一、是猶_二惡_レ濕而居_レ下也、」(公孫丑篇上)

之に反し仁義充塞する時は人は將に相食み、人倫は全く廢れて終ふのである。則ち曰く「前略、楊墨之道不_レ息、孔子之道不_レ著、是邪說誣_レ民、充_二塞仁義_一也、仁義充塞、則率_レ獸食_レ人、人將_二相食_一、」(滕文公篇下)と。

五、五倫五常 中庸に於ては君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友の道を所謂五達道としたが、孟子に至つて五倫と稱し、本務の内容を明かにした。即ち「父子有_レ親、君臣有_レ義、夫婦有_レ別、長幼有_レ序、朋友有_レ信」と言つたのである。父子、君臣、夫婦、長幼、朋友

の五者は、社會的關係の五形式であつて、其の間に必要なる徳を親、義、別、序、信とし五倫と呼んだのである。ここに注意すべきは君臣と父子との關係である。孔子、子思は尊王の主義に基いて君臣關係を最高のものとしたけれ共、孟子は之に反して父子の親を以つて最大なるものとしたのである。蓋し孟子は人間の自然的至情を重要視し、且つは彼特有の民主主義的思想より父子關係を重く見たものであらう。故に孟子中には孝に關する思想多く、舜の大孝を賛し、孝道を以つて至大なるものと考へてをる。即ち離婁篇上に「事孰爲_レ大、事_レ親爲_レ大」と言ひ、又「孰不_レ爲_レ事、事_レ親事之本也」と云つてをる。又孝道の至は親を尊ぶより大なるはなしと言ひ、又憂を解くには父母に順なる以外に何もものないと言つてをる。即ち原文に「天下之士悦_レ之、人之所欲_レ也、而不足_二以解_レ憂_一、好色人之所欲_レ、妻_レ帝之二女_一、而不足_二以解_レ憂_一、富人之所欲_レ、富有_二天下_一、而不足_二以解_レ憂_一、貴人之所欲_レ、貴爲_二天下_一、而不足_二以解_レ憂_一、人悦_レ之、好色、富貴、無_二足_二以解_レ憂者_一、惟順_二於父母_一、可_二以解_レ憂_一、」(萬章篇上)と言つてをる。

次に五常説に就いて簡単に述べるに、五常とは人の常に行ふべき五つの徳目である。其の徳目中孟子の唱道したのは仁、義、禮、智の四徳であつた。それがのち漢の董仲舒に至つて之に「信」を加へ、之に配するに五行説を以つてし、仁（木）義（金）禮（水）智（火）信（土）を五常となすに至つた。（尤も後世には禮は火、智は水と呼ばれてをる）。

六、權道説 權道とは破格の義であつて常道ではない。則ち大義と小義、仁と義との衝突したる場合に處する臨機應變の道と言ふことである。これに就いて孟子は種々なる例を擧げてをる。則ち男女の授受親らせざるは禮であるけれ共、今嫂の水に溺れるのを見て、親ら手にて援ふは權である。即ち「淳于髡曰、男女授受不親、禮與、孟子曰、禮也、曰、嫂溺則援之以手乎、曰、嫂溺不援、是豺狼也、男女授受不親、禮也、嫂溺援之以手者、權也」（離婁篇上）と、則ち大義を完ふするには小義を犠牲にするは禮の精神に反せぬと言ふのである。然して天下を援ふと云ふ様な大義に對しては一時の權道や

覇道を以つて爲すべきではない。道（王道）を以てせなければならぬと云ふのである。即ち「今天下溺矣、夫子不援何也、曰、天下溺、援之以道、嫂溺援之以手、子欲手援天下乎」（同上）と言つてをる。

又告子篇下首章に或人が禮を以つて食へば飢死する。然らずして食へば食を得る。必ず禮を以てせんか、又親迎すれば則ち妻を得ない。親迎せざれば妻を得る。必ず親迎すべきか」と言へるに對へて「禮食、親迎は禮の輕きものである。飢死して性を滅ぼし、無妻にして人倫を廢するは食色の中の重きものなるが故に前者を棄てて後者を取る」と答へてをる。

こは孟子が一面に於て非禮の禮、非義の義、大人君子は爲さずと言ひながら之を認め、權を許す所は思想上の大なる缺陷と言はねばならぬ。

更に最も甚だしきは彼は義を以つて無上命法となし、直覺的、絶對的のものとして認めながら、義と仁と衝突したる場合仁を生かして義を無視するのを認めしあとがある。例へ

ば舜父、瞽瞍人を殺すの例を論じて「舜視_レ棄_二天下_一、猶_レ棄_二敵蹤_一也、竊負而逃、遵_二海濱_一而處、終_レ身訴然樂而忘_二天下_一、(盡心篇上)」と言つたあたり其の意を解するに苦しむ所であるが、これは恐らく孟子が民主主義者にして、随つて特に父子の親を至大のものと考へた結果であらうけれ共、一方より見る時は孟子の無條件的、直覺的義の觀念の破綻と言ふべきである。

三、修爲論

一、修爲論概説 修爲とは修養と同じく道德的品性を形成する方法である。さて孟子の倫理的目的は何であるかと云ふに、それは言ふまでもなく仁義禮智の四徳の完成を措いて他にない、而して孟子の倫理的修爲の可能及基礎となるものは、彼の性善説である。故に其の性善説と修爲との間には極めて密接なる關係を有するのである。

そこで孟子の論ずる所に由れば、凡て人は聖人と凡人とに論なく、其の天より附與せ

られた所の性に於ては同一である。而かも人の本然の性は善であつて、人は皆生れながらにして仁義禮智の萌芽たる四端の心及び良知良能を有するのである。故に修爲の根本的方法はこの四端の心を存養發達せしめることである。

然し人の心には猶物慾なるものがあつて、往々にして本心の光を隠蔽し、其の本然の性を閉塞することがある。故に物慾を寡くし、かつ欲情の作用を抑制せなければならぬのである。故に修爲の方法は二方面に大別すれば、其の一は積極的方法、其の二は消極的方法である。而して前者は更に分れて(イ)擴充、(ロ)養氣、(ハ)存夜氣の三者、後者は(イ)寡欲、(ロ)求放心、(ハ)知言、(ニ)環境の選擇の四者となるのである。

二、積極的修爲 積極的修爲の方法は本心(良心)の發動を存養發達せしめ一の道德的勇氣、信念にまで達成せしめることである。則ち擴充、養氣、存夜氣の三者である。

(イ)擴充 擴充とは仁、義、禮、智の四徳の端である所謂惻隱、羞惡、辭讓、是非の心を擴充發達せしめることである。即ち人は皆人に忍びざる心、爲さざる心を有つてゐ

る。之を忍ぶ所に達し、之を爲す所に達して始めて仁となり、義となるのである。即ちかかる仁の心、義の心をよし擴めて假り初めにも不仁、不義をなさぬ様にする必要がある。又惻隱、羞惡、辭讓、是非の心はたとへ隱微の間と雖も之を慎み、之を存養すれば、其の始はたとへ泉より湧出づる水の如く、始めて燃へる火の如く、微かな細やかなものであると雖も遂には大海となり、燎原の火となる如く到底物欲の妨げる餘地もない様になり、遂に聖人君子となることが出来るのである。

(ロ) 養氣 養氣とは浩然の氣を養ふことである、所謂浩然の氣とは何であるかと云ふに孟子は次の如く言つてをる。「曰、難言也、其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間、其爲氣也、配義與道、無是餒也、是集義所生者、非義襲而取之也、行有不慊於心則餒矣、(公孫丑篇上) 之によつて之を察するに浩然之氣とは要するに「自己の體驗に基く道義的勇氣である」と言ふことが出来る。其の内含する要素を擧げるならば、第一に浩然の氣とは單なる勇氣ではない、即ち、志(理)に帥

ひられる所の大勇である。孟子は志及び氣に就いて次の如く論じてをる、曰く「夫志氣之帥也、氣體之充也、夫志至焉、氣次焉、故曰、持其志」と。要するに「氣」とは意志又は勇氣であり、志は其の氣を帥ひる理性である。即ち浩然の氣とは正善と信じたことを斷じて行ふの大勇、故に秋毫の疚しき所なき公明正大なる勇氣である。第二に浩然の氣とは「以直養而無害」即ち至誠によつて養はれたる大勇である。故に自ら反みて縮(直)からば千萬人と雖も吾れ往かひの道義的大勇猛心である。第三に浩然の氣とは義と道とに配すべきもの即ち、理義と道義と勇氣との渾然たる一體なるが故に、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざる所謂大丈夫の勇氣である。第四に浩然の氣とは義を集めて生ずる所のものなれば決して一朝一夕によつて養成せられるものではない。實に多年善を積み、義を行ふ修練によつて出来る道義的信念の進りである。第五かかる道義的大勇なるが故に至大至剛であり又かかる道義的信念はただ體驗者のみの味得すべき世界であるが故に之を概念化することが出来ぬ。故に曰く言ひ難し

である。

要するに浩然の氣は實に道德的究竟の理想とも言ふべく、又融通無涯實に宗教的信念の境地である。これに達するには一に至誠、積善、集義の修練によつてのみ得られるものである。

(ハ)存夜氣 次に夜氣とは未だ物欲に陷溺せられない純良清明なる心である。即ち草木も眠る静寂そのものの夜半に於ける心は最も本然なる姿であつて、少しの邪念もなく純良無雜である。かかる心も晝間に於ては人々の感官に應ずる種々なる誘惑によつて、物欲の奔騰する所となるのである。故にこの夜氣を存養することは、やがて四端の心を助長發揮せしめ、仁義禮智の徳を涵養することが出来るのである。

三、消極的修爲 消極的修爲とは前述の積極的修爲とは反對に物欲を寡くし、欲情を抑制して、本然の性の發達を阻害せしめざることである。其の方法は寡欲、求放心、知言及び環境の選擇の四者である。

(イ)寡欲 とは文字の意の如く欲を寡くすることである。但し佛徒の説くやうな禁欲主義ではない。蓋し人の物欲は恰かも人の通らぬ道路に雜草の生ひ繁るが如く、又金屬類を放置しておけば錆を生ずるが如く、人の心も絶えず本心の光を發揮せしめるために、目の色に於ける、耳の聲に於ける、口の味に於ける、又は男女の欲情に於けるが如き盲目的なる本能衝動の發動を慎しまねばならぬ。それがためにはかかる欲情を誘發する機會を少くし、物欲を抑制することが必要である。即ち孟子曰く「養心莫善於寡欲、其爲人也、寡欲、雖有不能存焉者寡矣、其爲人也多欲、雖有不能存焉者寡矣、」(盡心篇下)と。

(ロ)求放心 放心を求めるとは放たれたる心を求めて本心に立返らせることである。即ち我々の本心はとかく物欲のために誘惑せられて玲瓏たる本心の明を逸失することが多い。故に常に反省して放心を求め、本心に立返ることに努めねばならぬ。之に就いて孟子は次の如く言つてをる。「仁、人心也、義人路也、舍其路而弗由、放其心而不

知_レ求、哀哉、人有_二難_レ犬放、則知_レ求_レ之、有_二放心_一而不知_レ求、學問之道無_レ他、求_二其放心_一而已矣、又曰く「今有_二無名_一之指、屈而不_レ信、非_二疾痛害_レ事也、如有_二能信_レ之者、則不_レ遠_二秦楚之路_一、爲_二指之不_レ若_レ人也、指不_レ若_レ人、則知_レ惡_レ之、心不_レ若_レ人、則不_レ知_レ惡、此之謂_レ不知_レ類也」(告子篇上)と、蓋し孟子の學問の道と言ふは今の道德的修養の道の謂である。何故ならば其の當時の學問は「修己治人」の學であるからである。

(ハ)知言 孟子「公孫丑篇上」に次の如く言つてゐる。「何謂_レ知_レ言、曰、諛辭知_二其所蔽_一、淫辭知_二其所陷_一、邪辭知_二其所離_一、遁辭知_二其所窮_一、生_二於其心_一、害_二於其政_一、發_二於其政_一、害_二於其事_一、聖人復起、必從_二吾言_一矣、」と、即ち言を知るとは世俗に行はれる邪惡の言葉の意を知つて其の弊に陥らないことをつとめねばならぬと云ふのである。即ち偏頗にして公明を害する言「諛辭」、放逸にして陷る所ある「淫辭」、邪僻にして道義に外れたる「邪辭」、遁避して窮する所ある無責任なる言「遁辭」の四言は徳を修める上に

極めて有害なるものである。故にこれ等の言に迷はされ、又不知不識の間に其の言に慣れると云ふやうなことは特に慎しまねばならぬと云ふのである。

(ニ)環境の選擇 最後に修爲上重要なことは環境の選擇である。孟子かつて齊王の王子の如何にも氣品高き態度を見て喟然として嘆じ、「居は氣を移し、養は體を移す大なるかな居や」と言つてをる。生れ出でたる子供は一樣に差別はないが、其の環境の如何によつて大なる差異を生ずる。故に仁を志して勵むものは特に注意を要すると言ふのである。蓋しこの思想は慈母三遷の感化に依る所大なるものありと云ふべきである。則ち「孟子自_レ范之齊、望_二見齊王之子_一、喟然嘆曰、居移_レ氣、養移_レ體、大哉居乎、夫非_二盡人之子_一與、(下略)」(盡心篇上)と。

第三章 政治思想

すでに第一章孟子思想概説に於て述べた如く、孟子の政治思想は彼の倫理思想の延長である。即ち仁義によつて徳を天下に布き、民を徳化し王道を實現することが政治の理想である。そのことは「孟子」の開卷劈頭に梁の惠王に對へて「王何必曰利、亦有仁義而已矣」と言つてをることでも首肯せられる。而もこの思想は孟子の全然獨創ではなく儒教の根本主義たる「修己治人」の思想を演繹發展せしめたものであることは既に述べた如くである。

即ち孔子は倫理に於て「仁」を説き、其の政治説に於て、徳治主義を唱道した如く、又子思が誠を以て原理として政治の理想は徳化にありとしたるが如く、孟子の政治説は又彼の倫理説「仁義」の政治的應用に外ならぬのである、さは言へ孟子の政治思想は單に先儒の思想の祖述のみでは固より無い。そは恰度彼の倫理説に孟子特有の創意があつ

たと同様に政治説に於ても又特異なる着想あることは言ふ迄もないのである。例へば、孟子が、王道論を唱へ、實際政治として利用厚生の道の必要を説き、道德生活と經濟生活との調和を論じたる如き、なほ又強く民主主義を主張し、民衆政治、輿論政治を尊重したる如きは、彼の孔子が、利は罕にしか言はざりし點、及び尊王の大義を尊重した點等に比較して甚だしく趣を異にするところである。次に孟子の王道論、道德と經濟との問題、民主思想等に就いて述べることにする。

一、王道論

一、王道の意義 王道とは又仁政とも云ふ。つまり、忍びざるの心（仁）を推して忍びざるの政（仁政）を施すことである。「忍びざるの心を推す」とは「老吾老、以及人之老、幼吾幼、以及人之幼」（梁惠王篇上）ことであつて忍びざるの政とはかかる仁の心を以つてする政治、即ち孔子の所謂「恕」の心を以つてする仁政である。かくすれ

ば其の結果は「天下可運於掌」と言つてをる。換言すれば王道とは人の本性である四端の心を本にして、民の安寧幸福を増進し民をして安らかな養生送死を営ましめるの政治である。

二、王道霸道の別 王道と霸道とは各其の目的と手段とを異にしてをる。故にこの區別を明かにすることは王道の意義を明瞭にする上に必要なことである。

王道は言ふ迄もなく孟子の政治的理想である。其の王道と霸道との辯に就いて孟子は次の如く言つてをる。「以力假仁者霸、霸必有_二大國_一、以德行仁者王、王不待_レ大、湯以_二七十里_一、文王以_二百里_一、以力服人者、非心服也、力不_レ瞻也、以德服人者、中心悅而誠服也、如七十子之服孔子也」と。即ち霸は力を以つて仁を假るもの、王は徳を以て仁を行ふものである。換言すれば霸は力乃至富至上主義に基づき、道德（仁）を手段とするもの、王は之に反して徳至上主義を奉じて經濟（富）を手段とするものである。

故に霸道の共通性は自己の名譽欲の奴隸となりて、富國強兵それ自身を目的とし、功利、法治、刑罰、攻伐、權謀術數をこれこととし、人民を畏服せしめんとするが故に、道德の如きは敢て眼中におかない。之に對して王道は道德を至上價值として、經濟（富）功利を手段とするが故に、霸道の侵略主義、軍國主義に對しては平和主義、道德主義である。それで其の結果は覇者の如く必ずしも大國を有ち、功業を起すことは困難なるべけんも、民をして中心悅服せしめ、君民一致の平和を實現することが出来るのである。孟子の王道が平和主義である點は次の語によつてもわかる。則ち曰く、「征之爲言正也、各欲_レ正己也、焉用_レ戰」（盡心篇下）と。

三、王道の内容 すでに述べた如く王道は一方に於て民の利用厚生を重んずる。けれどもこれが政治の究竟目的ではなくて、實に經濟（富）は仁、義、禮、智の民たらしめる基礎とするのである。則ち孟子は「養生喪死無憾、王道始也」と言つてをる。故に王道の理想を實現するには、二つの重要素が認められる。其の一は道德（仁義）であり、

他は經濟（利用厚生）である。蓋し經濟は生活の基礎なるが故に、恒産なくして恒心を保つことは、民の困難とする所である。恒心を保たざる結果は民の心が自暴自棄となり、放肆邪侈至らざるなきに至る、かくの如き事態に立ち至らしめて之を刑罰に處すると言ふ様なことは君子のなすべきことでないからである。故にこの意味において、孟子は經濟的生活を重視するけれ共、これはたゞ王道の方便として價值あるのみである。故に功利それ自身を目的とする論者とは全く意見を異にするのである。孟子が全く時流に阿附せず、仁義、王道を説いて諸侯より其の言迂遠なりとせられ、時に遇せられなかつた所以もここにある。而かも孟子は毅然として、仁義、王道を唱へ、不仁不義によつて天下を得ることは断じてくみしなかつたのである。そのことは次の語によつても首肯せられる。則ち曰く、「行一不義、殺一不辜、而得天下、皆不爲也」（公孫丑篇上）と。

四、王道の方法 王道の理想は一方に於て民の利用厚生に注意し、安らかなる養生喪死を遂げしめて、徳教を布き仁義の民たらしめるにある。故に其の方法の主要なるもの

は利用厚生之道として、(イ)井田の法、(ロ)輕租、(ハ)數罟斧斤の禁、(ニ)民の時を奪はざるこ
と。他に教育及び社會政策として、(イ)教育、(ロ)窮民救濟、(ハ)分業制度、(ニ)刑罰等であ
る。

第一、利用厚生方面

(イ)井田の法 井田の法とは一井九百畝を百畝づつ九區に分ち、中央の一區を公田とし、他の八區を民八戸に頒ちて公田は八戸の者の共同耕作として、其の收穫は官に租税として納めしめるのである。又別に家屋を建て野菜を栽培する爲めに五畝の宅地を給する。前者は時を以て易へ後者は不易である。則ち孟子は次の如く言つてをる。「卿以下必有圭田、圭田五十畝、餘夫二十五畝、（中略）方里而井、井九百畝、其中爲公田、八家皆私百畝、同養公田、公事畢、然後敢治私事、所以別野人也」（滕文公篇上）「五畝之宅、樹之以桑、五十者可衣、帛矣、雞豚狗彘之畜、無失其時、七十者可食、肉矣、百畝之田、勿奪其時、數口之家、可無饑矣」（梁惠王篇上）「五畝之宅、樹

牆下_レ以_レ桑、匹婦蠶_レ之、則老者足_ニ以衣_ニ帛矣、五母雞、二母彘、無_レ失_ニ其時_一、老者足_ニ以無_レ失_ニ肉矣、百畝之田、匹夫耕_レ之、八口之家、可_ニ以無_レ飢矣、(盡心篇上)と。

(ロ) 輕租　これは國用を節して、賦税を輕からしめることである。税斂重ければ民をして苦しましめることは言ふ迄もない。則ち曰く「王如施_ニ仁政於民_一、省_ニ刑罰_一、薄_ニ稅斂_一、(中略)、可_レ使_ニ制_レ梃以撻_ニ秦楚之堅甲利兵_一矣、(梁惠王篇上)」「孟子曰、易_ニ其田疇_一、薄_ニ其稅斂_一、民可_レ使_ニ富也_一」(盡心篇上)と。

(ハ) 數罟、斧斤の禁　禁令を設けて、素りに魚龜を罟し、又は樹木を濫伐せしめざることで、蓋し殖林、養魚の必要を言つたるものである。「前略數罟不_レ入_ニ洿池_一、魚龜不_レ可_ニ勝食_一也、斧斤以_レ時入_ニ山林_一、材木不_レ可_ニ勝用_一也、穀與_ニ魚龜_一、不_レ可_ニ勝食_一、材木不_レ可_ニ勝用_一、是使_ニ民養_レ生喪_レ死無_レ憾也、(梁惠王篇上)と。

(ニ) 民の時を奪はざることを、これは濫りに民に役を命じて勞をなさしめ、又農業の繁簡を考慮せず使役したりすることを諷しめたのである。蓋し當時戰國時代のこととて國防に

はた宮殿の造營等のために民に課役を命じたること多かりし爲であらう。則ち曰く、

「不_レ違_ニ農時_一、穀不_レ可_ニ勝食_一也云々」(梁惠王篇上)「彼奪_ニ其民時_一、使_レ不_レ得_ニ耕耨以養_ニ其父母_一、父母凍餒、兄弟妻子離散、彼陷_ニ溺其民_一、王往而征_レ之、夫誰與_レ王敵_一、(同上)と。

第二、教育及社會政策方面

(イ) 教育　恒産治まつて恒心が保たれる。ここに於て教育を施すべきである。即ち學校の教を謹み、教ゆるに孝悌忠信を以てし、家にあつては父兄に仕へ、出でては長上に仕へしめねばならぬ。これについて次の如く言つてをる。「(前略)謹_ニ庠序之教_一、申_レ之以_ニ孝悌之義_一、頌白者不_レ負_ニ戴於道路_一矣、(後略)」(梁惠王篇上)「前略、壯者以_ニ暇日_一、脩_ニ其孝悌忠信_一、入以事_ニ其父母_一、出事_ニ其長上_一、(後略)」(同上)「設_ニ爲庠序學校_一以教_レ之、庠者養也、校者教也、序者射也、夏曰_レ校、毀曰_レ序、周曰_レ庠、學則三代共_レ之、皆所_ニ以明_ニ人倫_一也、人倫明_ニ於上_一、小民親_ニ於下_一、(滕文公篇上)と、

(一) 窮民救済 孟子は既に一つの不義を行ひ、唯一個の不辜たりとも之を殺して天下を得るやうなことは断じて爲さないと云つてをる。況んや天下の窮民を見殺しにすると云ふことは孟子の良心の許さぬ所である。故に孟子は文王の政に倣つて、窮民に仁を施し之を救済せなければならぬ。所謂天下の窮民とは、(一) 老いて妻なき鰥、(二) 老いて夫なき寡、(三) 老いて子なき獨、(四) 幼くして父なき孤兒この四者である、則ち曰く「老而無妻曰鰥、老而無夫曰寡、老而無子曰獨、幼而無父曰孤、此四者、天下之窮民而無告者、文王發政施仁、必先斯四者、」(梁惠王篇下)と。

(ハ) 分業制度 天下百般の事を一人にて兼ねることは固り不可能のことでもあるし、生業の中には大人のなすべきこと、小人のなすべきこと或は心を勞するもの、或は力を勞するものがある。而して心を勞するものは治者となり、力を勞するものは被治者となり、力を勞するものは租税などを納めて治者を養ひ、治者は筋肉労働者に養はれるのであつて、これは天下の通義である。故に人は各々其の能、不能によつて何れかに従事せなければ

ばならぬ。則ち曰く「然則治天下、獨可耕且爲一與、有大人之事、有小人之事、且一人之身、而百工之所爲備、如必自爲而後用之、是率天下而路也、故曰、或勞心、或勞力、勞心者治人、勞力者治於人、治於人者食人、治人者食於人、天下之通義也」(滕文公篇上)と。

(ニ) 刑罰を廢すること 法治至上主義を奉じ、重刑論を唱へて有名なのは韓非子である。彼は徳政の効果なきことを次の如く言つてゐる。「その昔宋に一農夫が田を耕耘して居た、ところが突然兎が走り來つて、田の中の切り株に觸れて斃れたと云ふのである。それから後農夫は田を耕やさず毎日切株の番をして居つたが、遂に兎は取れなかつたと云ふ話である。恰度當世、徳政によつて國を治めると云ふ儒家の説は恰かも兎得んがために切株の番をしてをるやうなものだ」と皮肉つて儒家を嘲けつた。而して國を治めるに徳を以つてせずして、法により、重刑に依らねばならぬと云ふのである。蓋し彼の説は荀子の性惡説に立脚せるものであつて、人は生れながら正直なものはない、亂を喜ぶの

が人の性であるとしたのである、法治主義、重刑論は當然の歸結と言はねばならぬ。然るに孟子の説は全然反對である。孟子は性善を以つて人の本性としてをる。而して恒産を治めしめ、教ゆるに孝悌忠信を以つてすればあまり刑罰法治の必要はないと言ふのである。故に位ある仁人君子は民に刑罰をなすべきではない。即ち恒産を治めしめず、仁義を教へずして民の心を放肆邪修爲さざるなきに至らしめ、罪に陥るに及んで之を刑するは民を陷阱に導くと同様だと云ふのである。則ち曰く「若し民則無恒産、因無恒心、苟無恒心、放肆邪修、無不爲己、及陷於罪、然後從而刑之、是罔民也、焉有仁人在位、罔民而可爲也、」(梁惠王篇上)と。

然らば孟子は絶対に非刑罰論者かと云ふに必ずしもさうではない。己むを得ずして刑罰を行はねば他に良法なき時は之を執行せねばならぬ。けれ共かかる場合、王の獨斷は固より、諸大夫等の少數者の意見によつても、決すべきではない。國の輿論を擧げて、一致した時、尙ほ更に殺すべきか否かを慎重に檢察して而して後に執行すべしと言つて

をる。このあたり、孟子の仁政論は至れり盡せりと言ふべきであり、且つ孟子の民主的色彩の露骨に表はれてゐることを察することが出来る。即ち曰く「左右皆曰可殺、勿聽、諸大夫皆曰可殺、勿聽、國人皆曰可殺、然後察之、見可殺焉、然後殺之、故曰國人殺之也」(梁惠王篇下)と、此の如くにして而して後に民の父母と爲ることが出来ると言つてをる。即ち王道が實現するのである。

五、結論 如上の理想と方法とによつて結ばれるものは言ふ迄もなく王道の實果である。即ち民は仁義を身に體し、孝悌忠信の人倫行はれて、上の惠、下に潤ひ、蒼生榮へ、ここに民は安らかなる養生喪死を營むことが出来る。而して民は王の徳政に衷心より悦服し、君民一致、和氣満々、春風駘蕩たる先王の世の如き理想の世界が實現するのであらう。而して詩經大雅部靈臺篇にある次の語の示す場面はおそらく孟子の理想境であらう。則ち曰く「經始靈臺、經之營之、庶民攻之、不日成之、經始勿亟、庶民子來、王在靈囿、麋鹿攸伏、麋鹿濯濯、白鳥鶴鶴、王在靈沼、於物魚躍」と。

二、道德及經濟の調和及價值論

孟子が王道論に於て道德と經濟即ち仁義と利用厚生との間に極めて密接なる關係あることを認め、且つ道德を以て至上價值とし、經濟を手段として説いた點は最も妥當なる見解と言ふべきであり、且つ政治を實際化した點に於て注意すべき思想である。ここに筆を改めて之に就いて述べることにする。先づ第一に考ねばならぬ點は、孟子が一方に徳治主義をとりながら經濟を認むるを得なかつた理由である。今其の理由の主なるものを擧げるならば大體二方面から之を認めざる事が出来る。其の一は思想的理由であり、他は社會的理由である。

(イ) 思想的理由 元來孟子の紹述した孔子の思想は全然民を害することを考へなかつたではないけれ共、余りに其の政治説は徳治主義に偏し、非實際的であつたことである。そのことは孔子と子貢との問答に於て、「子貢問政、子曰、足食足兵民信之矣、

子貢曰、必不得己而去、於斯三者何先、曰去兵、子貢曰、必不得己而去、於斯二者何先、曰去食、自古皆有死、民無信不立、(顔淵篇)と言つてをるのでも首肯せられる。ここに想を走せた孟子は民の生活の基礎として經濟的方面の不可缺なることを觀破したのである。

(ロ) 社會的理由 これは時代思潮よりの要求である。即ち當時世は戰國時代であつて、諸侯は各富國強兵を目的として、自國を強大にし、物資を豊富ならしめんためには手段を選ばず、全く力と功利萬能の時代であつたのである。故に功利的一面を無視した單なる徳治主義は迂遠極まるもの、空虚なものとして顧みられなかつたのである。ここに孟子は反省する所あつて眞の王道實現には徳治を主として之に調和するに經濟を以つてせんことを觀取したがためである。

第二に道德と經濟との調和、孟子は其の必要を次の如く論じてをる。即ち恒産なくして恒心あるものは唯だ士のみよくする所である。民の如きは恒産なければ恒心を保つこと

は困難である。苟も恒産なき時は自暴自棄、不仁不義至らざるなきは民の自然である。故に治者たるものは、民をしてかくの如き事態に立ち至らしめ、而して之に對するに刑罰を以てするが如きは恰かも民をして陷穽に陥れるやうなものである。故に名君は決してかのやうなことをしない。王道の第一歩は實に恒産を治めしめるにあると言ふのである。即ち曰く「無_二恒産_一而有_二恒心_一者、惟士爲_レ能、若_レ民則無_二恒産_一、因無_二恒心_一、苟無_二恒心_一、放辟邪侈、無_レ不爲_レ已、及_レ陷_二於罪_一、然後從而刑_レ之、是罔_レ民也、焉有_二仁人在_レ位、罔_レ民而可_レ爲_レ也、」(梁惠王篇上)と。

第三に二者の價值關係に就いて論ずる所を見るに、孟子は道德を忘れて功利(經濟)にのみ没頭するの非なることを認めてをる。換言すれば、孟子は目的と手段との關係を誤ることなく仁義道德を以つて目的價值とし、經濟を以て手段的價值のものと認めてをるのである。其の例證として彼は次の如く論じてをる。即ち飲食とか耳目の欲に没頭することは、小(物欲)を養ふて大(仁義)を失ふ所以である。故に大人、君子はかかる

ことを爲さない。則ち「體有_二貴賤_一、有_二小大_一、無_二以_レ小害_レ大_一、無_二以_レ賤害_レ貴_一、養_二其小_一者爲_二小人_一、養_二其大_一者爲_二大人_一、(中略)飲食之人、則人賤_レ之矣、爲_二其養_レ小以失_レ大也、」(告子篇上)と。更に又利に就くと義に就くとは、其の間僅かの差であるけれ共、遂には聖人と、盜跖との差異を來す岐路であると論じてをる。即ち「孟子曰、鷄鳴而起、孳孳爲_レ善者、舜之徒也、鷄鳴而起、孳孳爲_レ利者、蹠之徒也、欲_レ知_二舜與_レ蹠之分_一、無_レ他、利與_レ善之間也、」(盡心篇上)と、其の二者の價值觀は極めて妥當なるものと言はねばならぬ。

三、民主思想

孔子及び子思は君臣關係を以て人倫關係の最たるものとして、尊王の大義を唱道した。然るに孟子は父子の親を以つて君臣の義よりも至徳として著るしく民主的色彩を帯びてゐる點はすでに折にふれて述べた如くである。然しそれ故に孟子の民主思想は子の

獨創的產物なりと考へるは至當でない。何故ならば民主的思想は儒教の本源である三代の思想に明瞭に表はれてゐるからである。例へば古代に於いて禪讓放伐、易世革命の思想は嚴として行はれてつたのである。故にこの思想は寧ろ孟子によつて復活せられたものと云ふが正當である。さは言へ、孟子は孔子及び子思の學統を祖述し、就中孔子の思想及人物を尊崇して措かず、生民ありてこの方未だ孔子あらざるなりと言ひ、又願ふところは則ち孔子を學ばんと言つてをるにも係らず、かかる反對の思想を最も濃厚に唱へし所以に就いてはそこに何等かの原因がなくてはならぬ。おそらく其の基く所は、彼特有の國家觀、天命説の確信乃至は孟子獨特の自尊の念の然らしめたものであらう。次にその民主思想の表はれと見るべき孟子の國家觀、天命説の徹底、輿論尊重、人材登用、人格尊重等に就いて述べることにする。

一、孟子の國家觀　その國家觀について次の如く述べてをる。即ち「孟子曰、民爲貴、社稷次之、君爲輕」(盡心篇下)と。この民を尊びて君を輕しとする思想は明らかに民主

的思想である。けれ共この思想は孟子獨特のものではない。何故ならばこの思想は支那民族の歴史的觀念でもあり、又支那特有の國家組織上當然の歸結と云ふべきであるからである。故にこの點は我が國家の體制が自然的であり、民族的である點と全く其の撰を異にするところである。由來支那の國家なるものは征服的國家、奪略的國家とも見做すべき國家であつて、つまり其の國家組織は多數の異種族を或る時代に於て、或る優秀なる民族が征服するのである。而して其の中の最も勢力あるものが衆望によつて君子となるのである。若し其の君主が勢力を失墜する時は他の民族が之を放伐して位に就き、名づけるに天命を以つてし、何も不思議としてゐないのである。實に支那の過去に於ける歴史は大體に於て漢族、滿州族、蒙古族の全く勢力争ひであつたのである。

かかる國柄なるが故に君臣の大義は行ふとして行ふことが出來ぬのである。即ち支那の君主なるものは政治の一機關に過ぎないが故に當然の結論として、君は輕く民は重しと云ふ民主的思想とならざるを得ないのである。この故に孟子は民衆の輿論に投ずれ

ば天子となり得ると次の如く言つてをる。即ち「是故得乎丘民、而爲天子、得乎天子、爲諸侯、得乎諸侯、大夫、」(盡心篇下)と。

二、天命説の徹底 結論から言ふならば所謂天命説は之を徹底せしめれば即ち民意、民主思想とならざるを得ないのである。然らば天命とは何のことかと言ふに一言にすれば、それは天より人に課せられたる命令である。而してこれに二方面の意味がある。一は氣數の命、他は性の命である。前者は所謂人間の壽命の意で、後者は人の天(自然)より附與せられた所の性を實現する命の意である。而して人がこの二つの命を安全に完ふするには人力では出来ないので必ずや天の保護監督を必要とするのである。然しながら天は人に對して自ら直接手を下して之を行ふことは出来ぬ。故に生民中性命の理を最も完全に發達せるもの即ち聰明睿知なる有徳の君子をして、これに代理せしめるのである。この選ばれて命を受けたものが即ち天子である。

然し若しこの天子にして、天の命に背き、生民の天命とする壽命、性命の理を完ふ

せしめ能はざる時は最早天子とは言へないのである。かかる時には他の有徳の君子に代らしめて代行せしめねばならぬ。故に惡徳の君子を放伐することは天命として少しも不都合はないのである。ここに於いて孟子はこの天命説を確信して、殷の湯王が夏の桀王を、周の武王が殷の紂王を放伐したことを當然のこととして認めたのである。則ち次の如く言つてをる。「臣弑其君可乎、曰、賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘、殘賊之人、謂之一夫、聞誅一夫、紂之矣、未聞弑君也、」(梁惠王篇下)と。之を以て孟子の民主思想はこの天命説を確信して徹底せしめたものと認めることが出来る、即ちこの天命の觀念を宗教的に見ずして、合理的に解する時は自ら天意は民意となり丘民に得らるれば即ち天子となり得るのである。之を文献に徴せば、書經中にある「天視は我が民視に自ひ、天聽は我が民聽に自ふ」、蓋し孟子の民主思想はここに根柢を措くものであらう。

三、輿論尊重 前述の如く天意は即ち民意である。故に天命の徹底は必然的に輿論尊重とならざるを得ないのである。この考へから孟子は人材を登用する場合にも刑罰を行

ふ場合にも單に少數者の意見によつて決せず、多數の輿論即ち國人が擧つて然りとする場合にのみ行ふべしと説いてをる。

刑罰のことに就いては王道論下に於て既に之を述べた如く彼が刑罰無用論を説いた根柢は一面彼の性善觀或は王道主義の當然の結果であるが、又一面已むを得ずして刑罰を行ふ必要ある場合之を決定するには廣く民意に訴へて決定せねばならぬと説いてをる。この思想は明かに彼の民主的色彩を表はせるものと言ふことが出来る。則ち曰く、「左右皆曰可殺、勿聽、諸大夫皆曰可殺、勿聽、國人皆曰可殺、然後察之、見可殺焉、然後殺之、故曰國人殺之也、（梁惠王篇下）」と。

尙又賢者を登用せんとする時も同じく輿論を尊重してをるのである。即ち曰く「左右皆曰賢、未可也、諸大夫皆曰賢、未可也、國人皆曰賢、然後察之、見賢焉、然後用之、左右皆曰不可、勿聽、諸大夫皆曰不可、勿聽、國人皆曰不可、然後察之、見不可焉、然後去之」（同上）と。これを以つてしても孟子の思想の民主的なるを察す

ることが出来る。

四、人材登用 人材登用の思想は儒教全體に通ずる思想であつて必ずしも孟子に限るわけではない。何故ならばこの思想は一面徳治主義の産物であつて仁政を布くには賢人君子の輔弼を要するからである。然し又一面には民主的思想の結果とも見ることが出来る。何故ならば君主の專制的政治に陥らしめず、民意に合致する政治を布くには民の中より人材を求める必要があるからである。孟子は次の如く言つてをる、即ち「如惡之、莫如貴徳而尊士、賢者在位、能者在職、國家間暇、及是時、明其政刑、雖大國必畏之矣、」（公孫丑篇上）「孟子曰、尊賢使能、俊傑在位、則天下之士、皆悅而願立於其朝矣、」（同上）と。

五、人格尊重 仁義に基づく徳治主義は其の本質に於て人格主義なることは言ふ迄もない。何故ならば、道德の根本原理は人を人格的價值體として自己を尊重すると共に他を尊重し、敬愛せねばならぬからである。けれ共孟子に於てはこの觀念を更に君臣關係

にも推し及ぼし、全く對當のものと考へて居るのである。例へば、君主の臣を見ること土芥の如くなれば、則ち臣は其の君を見ること寇讎の如しと言つてをる。即ち、「孟子告齊宣王曰、君之視臣如手足、則臣視君如腹心、君之視臣如犬馬、則臣視君如國人、君之視臣如土芥、則臣視君如寇讎、」(離婁篇下)「孟子曰、無罪而殺士、則大夫可去、無罪而戮民、則士可去、」(同上)と。この思想を推して見ても、孟子の民主的傾向の顯著なるを察することが出来る。

第四章 其他の思想

倫理思想・政治思想は「孟子」中の主要思想であるが他にも注意すべきものがある。(一)反性説、(二)善に関する思想、(三)愛に関する思想、(四)中に關する思想、(五)心理説等である。

一、反性説

孟子の倫理思想中には宋儒の復性説の先驅とも見るべき思想を認めることが出来る。反性説が即ちそれである。則ち盡心篇下に次の如く言つてをる。「孟子曰、堯舜性也、湯武反之也」と。蓋し其の意味は堯舜は自ら人の本性を體するものなるが故に善、之に反して殷の湯王、周の武王は積極、消極二方面の修爲即ち存養、寡欲の結果本性に反つたものなるが故に善であるといふのである。要するに「反之」とは本然の性に反つて善を完うするの意である。然し子の反性説は宋儒の所謂復性説とは同一ではない、何故なら

ば孟子のそれは宋儒のそれが抽象的、形而上學的なるに比して哲學的意味がないからである。

二、善に関する思想

孟子は善、美、信、聖に關して卓越した見解を有してをる。即ち盡心篇下、浩生不害との問答に於て次の如く述べてをる。「何謂善、何謂信、曰、可欲之謂善、有諸己之謂信、充實之謂美、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖」と。欲すべき之を善と謂ふの「べき」と言つた點は特に注意を要する。「べき」とは今日謂ふ所の理想であり、當爲である。善を以つて單なる心理的要求と解せず、一の規範的要求と見た點は實に卓見と言ふべきである。

三、愛に関する思想

孔子の仁の中には自ら差別的意味を含んでをるけれ共、一面「汎愛衆而親仁」といひ、「四海之内皆兄弟也」と言つて平等的愛を主張してをる、之に反して孟子は愛の差別的方面を著しく高調して、寧ろこれを以つて、愛の真相と考へてをるのである。これは一方に於ては當時の異端墨者の兼愛説が儒教の仁の觀念とは似而非なるが故に破邪顯正せんがために差別的一面を高調したるにもよる。即ちかつて墨者夷子が、「愛に差等なし、施すこと親より始む」と言へるに對して、そは眞に衷心からの愛の觀念であるかと反問してをる。則ち「徐子以告夷子、夷子曰、儒者之道、古之人若保赤子、此言何謂也、之則以爲愛無差等、施由親始、徐子以告孟子、孟子曰、夫夷子、信以爲人之親其兄之子、爲若親其隣之赤子乎、」(滕文公篇上)と。蓋し又一方より見れば仁に配するに義を以てした孟子思想の當然のこととも言へる。

四、中に関する思想

三代に其の端を發し、孔子、子思を經た「中」の觀念は、孟子に於て如何に解せられたかを見るに、孟子は魯の賢人子莫の「執中」の觀念を「執一」に近きものと解し、而かも「執一」は却つて道を賊ふものであると論じてをる。即ち墨子の兼愛説と楊子の爲我説の中を取ると言ふことは恰かも綿入の衣服と單衣の衣服の中を取つて袷を年中着用するやうなものである。即ちかかる中は一を執つて之に偏するものであるから不可である。それは中を執つて權なきが故であると言つて、變通自在なる權を以つて之に對へてをる。蓋し權とは權道の權であつて、變通ある「時中」の謂である。則ち次の如く言つてをる。「孟子曰、楊子取爲我、拔一毛而利天下不爲也、墨子兼愛、摩頂放踵利天下爲之、子莫執中、執中爲近之、執中無權、猶執一也、所惡執一者、爲其賊道也、舉一而廢百也、」(盡心篇上)と。

五、心理説

孟子は心の作用を三方面に分けて、一、志、二、氣、三、欲の三者としてをる。即ち曰く、志は氣の帥なり、氣は體の充てるなりと。蓋し其の意、氣とは肉體的、實行的のもの、即ち意志であり、志とは其の氣を帥ゐるもの即ち理性であり理想である。而して欲は主として食色の欲即ち情欲である。この心の三分觀はプラトーンの分類の理性、氣慨、體欲の三者にも比すべきものであり、又今日心理學の知識、意志、感情の三分説にも相當すべきものである。

第五章 孟子思想の批評

最後に孟子の倫理思想並に政治思想の長短の主要なるものを概評して筆を擱くこととする。

一、倫理説批評

先づ其の長所と認むべき點に就いて述べるに、第一、性善論に基く四端擴充説は倫理的修爲上妥當なる見解と云ふべきである。即ち性が果して善なるか、惡なるかは別問題とするも、とに角人を以て道德的本體乃至は可能體と見做して、人は生れながらに道德的意欲（四端の心）を有し、この意欲を發達存養せしめ擴充せしむればやがて仁、義、禮、智を體得し、道德的品性を陶冶し得ると云ふ思想は妥當なる意見であり且つ、今日の倫理學上の人格實現説と一致する所である。なほ又告子の仁内義外の説を駁して、飽

く迄仁義は人の本性に基づくものとし、荀子の所謂積偽論等に陥らずして、道德的生活に對する積極的基礎を與へたる點はこれ亦卓見と云ふべきである。

第二、仁義並稱論は儒教の倫理思想を發展せしめ實踐的價值を大ならしめたものと言ふべきである。何故ならば、孔子は「仁」を稱して、未だ義なる徳乃至は本務を明瞭に概念化せなかつた。それが爲めに道德が稍もすれば、主觀的に陥り、社會的生活の規矩或は原理として甚だしく弱味があつた。然るに孟子は仁に配するに仁義を以つてして、其の由るべき客觀的規矩を明らかにした。これによつて人倫を正し、道德の實踐上貢獻した所大なりと云ふべきである。次に其の短所、弱點と認むべきものを擧げるならば、第一、孟子の性善説或は先天良心論は遂に論理的破綻に陥らざるを得なかつたことである。即ち、孟子の性善觀は始め一元論に出發しながら、性惡なる分子物欲なるものを認めざるを得なくなり、遂に二元論に墮したることである。而かも性善説は性理論として正當なるものと言ふことは出來ぬ。何故ならば性そのものは本來善でも惡でもなく、

又善となり、悪となる素質を有するものだからである。而して又一方に於て人は生れながらにして良知良能を有し、孩提の童も其の親を愛するを知らざるなし、長ずるに及んでは其の兄を敬するを知らざるなし、と言つて、明らかに直覺説を説きながら、一方に於て實現説を唱道した點は論理的不徹底を缺くと言はねばならぬ。

第二、孟子は仁義を提唱し、これを以て無條件的、直覺的格率の如く認めながら、一方に於ては小義を捨てて大義を取ると言ひ又仁と義と撞着した場合に於ては義を捨てて仁を取るかの如き思想を示してをる。例へば舜の父瞽瞍が罪を犯した場合天下を棄てること敵蹤を捨ててが如く竊かに海濱に逃れ天下を忘れて樂しむと言つてをる。而して辯ずるに權道思想を以てしたが、これは明かに直覺論から有極論に陥つたものと言はねばならぬ。又一方から考へれば大義親を滅すと云ふ森嚴なる義の觀念の冒瀆とも見られる。

二、政治説批判

次に孟子の政治説に就いて概評するに其の美點長所と認むべき點は第一、政治思想中王道論は崇高なる理想に基づく卓越せる見解と言ふべきである。即ち其の内容に於て徳治の一端に走らず、其の手段として、民の養生喪死を念とし、經濟的價値を認めて、これとの調和を試みた點は正當と言ふべきである。なほ道德と經濟との價値觀を誤らずして道德を以つて究極のものとし、經濟を手段視したる點共に妥當と言ふべきである。

第二、民の人格を尊重し、輿論を重視し、之に望むに仁術、保民を以てする等治者としての態度を論じたる點は正當である。蓋し、政治は民の政治なるが故に、民意を尊重することの必要なることは言ふに及ばず、又民をして治者の單なる名譽、權勢の利己的満足の奴隸たらしめることは政治家として固より不可であるからである。次に短所、弱點と言ふべき點に就いて見れば、

第一、孟子の民主的思想は支那民族性乃至は國家體制上當然の歸結とは言へ、孔子、子思が君臣の大義名分を尊重したるに比すれば、寧ろ改悪と言ふべきである。恐らく孔

子、子思は奇を好んで尊王の大義を説いたものではあるまい。人倫の輕重、徳治の達成上必然的にかくなつたものである。然るに余りに天命説を徹底せしめ、遂に個人主義的傾向に陥らしめたる點は、正當と言ふことは出来ぬ。

第二、政治思想が安價なるデモクラシーに陥り、衆愚政治に墮したるが如き傾向あること。即ち天命説の徹底が余りに極端なために、民意尊重、輿論重視、人格尊重の中には固より本質的に良好なる分子あることは既に述べた如くであるが、其の半面に於て個人主義に墮し、余りに國人に阿附追従するの傾向があることである。例へば賢人を採用する時にも、刑罰を行ふ時にも、必ず凡ての國人の輿論に訴へる等と云ふことは民意の尊重と言ふよりは寧ろ政治の墮落と云ふべきである。

孟子解義 畢

昭和五年六月二日印刷
昭和五年六月六日發行

文檢用孟子解義

正價金參圓五拾錢

著作者 教育學術會

發行者 阪本眞三
東京市神田區一ツ橋通町二番地

印刷者 寺井藤左工門
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



發行所

東京市神田區一ツ橋通町二番地
振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

〔書釋註文漢版出館同大〕

高木武著	石川誠著	田井嘉藤治著	笠野哲人序 笠野彬雄著	吉波彦作者	吉波彦作者	笠松彬雄著	森山右一著	龍澤良芳著	教育學術會著	教育學術會著	文學博士 宇野哲人著	文學博士 宇野哲人著
▼受 考	▼復 文 用	▼最 近 支 那 時 文 寶 鑑	▼唐 詩 選 詳 解	▼古 文 真 寶 (後集) 詳 解	▼精 要 韓 非 子 詳 解	▼唐 宋 八 家 文 詳 解	▼文 驗 用 檢 史 記 選 釋	▼文 驗 用 檢 左 傳 選 釋	▼文 驗 用 檢 孟 子 解 義	▼文 驗 用 檢 論 語 解 義	▼四 書 講 義 中 庸	▼四 書 講 義 大 學
最上製	最上製	最上製	最上製	最上製	最上製	最上製	最上製	最上製	最上製	最上製	最上製	最上製
金壹圓 拾八錢	金貳圓 拾五錢	金貳圓 拾五錢	金貳圓 拾八錢	金貳圓 拾七錢	金四圓 拾七錢	金四圓 拾七錢	金三圓 拾五錢	金三圓 拾八錢	金三圓 拾五錢	金貳圓 拾八錢	金貳圓 拾八錢	金貳圓 拾三錢

座口金貯替振 行發館同大 區田神市京東
番貳七八京東 二町通橋ツ一

〔錄目書圖行發館同大〕

◇笠松彬雄氏新著◇

唐宋八家文詳解

〔菊判最上製美本 全壹冊六百餘頁 正價金四圓八拾錢 送料廿七錢〕
 文檢漢文科の指定参考書で必讀書中の必讀書たるもの
 從來試験に一番多く出題される本書は今や著書の手
 依つて詳解せられた。これまで八家文研究に多大の不
 便を感じて居られた人々にも本書の出現に依つて容易
 に徹底的に研究を進めることが出来るであらう敢へて
 本書を責任を持つてお勧めする次第である。

◇目 黒 藤 一 著◇

最新東洋歴史辭典

〔菊判最上製美本 全壹冊四百餘頁 正價金參圓拾錢 送料十八錢〕
 本書は中等教科書同参考書一觀東洋史参考書の主なる
 名辭につき簡明に解説したものである現今東洋歴史を
 研究する時辭典の必讀を痛感せらるゝ人士の多きを思
 ひ著者が數年の歳月に全身の力を投じて完成したもの
 が本書である。

◇佐藤種治氏新著◇

西洋歴史精説

〔菊判最上製美本 全壹冊五百餘頁 正價金參圓八拾錢 送料十八錢〕
 本書は文部省教授要目に準據して各項目の内容最新に
 努力し記述は理解し易く趣味ある方法をとリ従前の試
 験問題は漏らさず悉く織込み各章の末に概括を丁寧
 表解の説明法にて記したる等深究理解し易く工夫し内
 容に於ても從來の史に比較して四大特色を有する等理
 想的の良書である。

◇橋本賢康氏新著◇

國民地理通論

〔四六判最上製美本 全壹冊五百餘頁 正價金貳圓五拾錢 送料十八錢〕
 本書は著者が多年の地理學研究の知識を基礎とし最新
 の學說によりて難解の地理學通論を通俗化したもので
 あるから讀んで趣味の湧くうちに地理學の知識を會得
 せしむることに最も力を注いだ科學的常識といふ事が
 出来る。大方の購買之を利用して新知識を得られ又新
 日本の建設に資せられんことを望むものである。

○ ((録目書圖行發館同大))

今それ等に關する消息を知りたがつてゐる。勿論数千頁の支那史はあつたが、それは余りに無味であつた。天の氣に満ちた書物である。而も此の兩者を打つて一丸とした物は未だ世に現はれてゐない。茲に出づ可くして出たのか本書である。著者は天草の人其の文には悉く血が通つてゐる。

◆奈良島知堂氏新著◆

少年加藤清正

(四六判最上製美本 全冊五百餘頁) 正價金貳圓 送料十八錢
清正は單に時代から棄られるやうな武邊一通の人物ではない。開闢の精神を保持してゐる。本書は清正のその歴史を、高麗の片鱗のみを知る青少年諸君は必ずや本書に多大な興味と満足とを覚えることと信じてゐる。少年に好適の讀物である。

◆栗原寅治郎氏新著◆

解り易き 最近世界の大事

(四六判最上製美本 全冊四百頁) 正價金貳圓 送料十八錢
最近國際關係の著しい接近と國民活動の舞臺の大いなる擴張とは自ら民衆をして世界的見識の涵養を痛感せしむるに至つた。本書は此の國民的要求に應じて編纂されし内容豊富、平易、一讀直に現時の紛糾する國際政局を明かにし得べし。敢て國民の一讀をすむ。

((録目書圖行發館同大))

◆春藤與市郎氏新著◆

國史 吉野朝時代記

(四六判最上製美本 全冊六百五十頁) 正價金貳圓八拾錢 送料十八錢
正義介れて暴力勝つか!! 血涙滴る吉野朝が哀史!! 古今の大忠臣や國家の大功臣を祠られる別格官幣社現今二十五社の中その半ばに近い十社までが實に吉野朝時代の忠臣である。依て知る國史上この時代は眞に勤王の精神が炎々と燃え國體觀念が大に發揮された時である。ことを。則ち國民に最も健全なる思想を養成するの急務なる今日先づ吉野朝の歴史を學ぶことが何よりも必要であると考へる。著者は茲に見る所あり正確に詳細且つ平易に吉野朝の由來より終末まで及千古大忠臣の各事蹟を記して第二の國民たるべき青少年を初め一般の人士に捧げ以て國家に奉ずるの一端を盡くさんことを希ふ次第である。

◆大久保 龍氏新著◆

少年八幡太郎義家

◆小林 博氏著◆

文檢歴史科受験法と問題

(菊判最上製美本 全冊四百頁) 正價金參圓五拾錢 送料金十八錢
本書の内容は勉強の方法参考書の選擇出題の傾向變遷答案の口述等に虎の巻を述べ、又幾多の出題統計を作り、歸納的に之を説明し更に過去の出題を祖上に批評す。本書なして歴史科を受験するは超時日記練習をせよ、或は徒らに樹によつて魚を求むるの嘆を諷刺することあらんか切に一本をすむ。

◆瀧本一郎氏新著◆

世界性業婦制度史

(四六判最上製美本 全冊五百餘頁) 正價金貳圓八拾錢 送料金十八錢
性業と現代宗教は相容ないが往時は東淫を宗教儀式上必要な行爲として強制した道徳は性業を惡弊と認するが一度は果すべき人類の義務だと教た時代もある又遊廓を官營とし性業を調占した國もある然し思想の進化道徳の純化は公娼不可主義に移た。本書は世界各國の道徳宗教社會思想の變遷が性業を通じて美術文藝に表現した陰影や其時代の制度文化に及した影響を述べ又性業法規施行迄の経緯を説いたから社會問題思想問題婦人問題研究者には必讀の要あり。

◆宮崎久松氏新著◆

少年保元平治合戦記

(四六判最上製美本 全冊三百餘頁) 正價金壹圓八拾錢 送料十二錢
八幡太郎義家の一生は好個の史劇である。日本の戰物語はどれもこれも情あり涙あつて血湧くうちに優しきを持ち内躍るうちに雅味を含んでゐるものはないが八幡太郎の一生の如きは殊にさうした色彩を放つてゐる我國の青少年が色々の武勇傳を朝夕の伴侶として楽しんでゐる中にも特に義家に親しみ懐しみでびつたり吸付られるもの其麗はしい性格と華やかなる行爲とに觸れて知らず識らず好きにされて仕舞ふのであらう。

少年保元平治合戦記

(四六判最上製美本 全冊五百餘頁) 正價金貳圓 送料十八錢
本書は鎮西八郎爲朝や源義朝や平清盛、悪源太義平等源平の勇士達が目覺しい活躍は讀者に血湧き肉躍る快感を與へずにはおかない、而も其面白さの中に吾々は日本魂の精華をなす武士道をまざりと見せられる。斯くして本書は讀者に息もつかせぬ興味と無限の教訓を與へるであらう。

《大同人館發行圖書目錄》

◆濱田壽郎氏新著◆

少年楠木正成の精忠

(四六判最上製美本 正價金貳圓 十八錢料) 全壹冊五百餘頁

「七度生れて我が代を興りませう」と叫んで美川の露と清れた楠木正成公の精神こそは昭和の青少年諸君が昭和の大帝のために捧げ奉るべき唯一の道であると信じます。公が一度笠置の行宮に大命を拜して以来赤坂の春に千早の秋に美濃の奇計を以て賊を捕まへ、遂に美川に討死した勇ましくも涙ぐましくも至誠誠忠の物語に著者の心血を傾いた此一篇の中に最も正しく最も詳に収められてあります。

◆大野武男氏新著◆

少年塙保己一傳

(四六判最上製美本 正價金壹圓六拾錢 十二錢料) 全壹冊三百頁

世界的盲人學者塙保己一の涙の生涯を著者獨特の筆によつて染め出したもの、新日本を背負て立つべき現代の青少年たるものは本書を一讀して更に大きな飛躍を志すべきである。

◆松本浩記氏新著◆

少年木下藤吉郎

(四六判最上製美本 正價金貳圓 十八錢料) 全一冊五百頁

少年豊臣太閤

(四六判最上製美本 正價金貳圓 十八錢料) 全一冊五百頁

太閤秀吉は我が戦國時代に生をうけた世界的大英雄でもしも過去の日本には珍らしい大きな理想と抱負の所有者なのであります、そして最も彼の生涯は實に花々しい奮闘の連続であり勇敢なる戦争の歴史であります。大望に燃ゆる日本青少年は太閤と共に語り太閤と共に生きねばなりません、本書は其爲の何よりも善き諸君の友であります、太閤の少年時代日吉丸の幼年の時から信長に仕へて出世し山崎の合戦より天下統一統して其から最期までの傳記は茲に著者によりて正しく完成せられ模範的の良書として世に公にせられたのであります。

《大同館發行圖書目錄》

◆山口 實氏新著◆

少年東郷平八郎

(四六判最上製美本 正價金貳圓 十八錢料) 全壹冊三百頁

本書は東郷元帥の幼少時代より日露の大戦の大光輝の功績を初め逸話の数々まで詳細に叙述せる書である我々の東郷元帥の傳記を詳しく知らんとする青少年を初め一般の人々に本書をすすむ。

◆奈良島知堂氏新著◆

少年乃木大将傳

(四六判最上製美本 正價金貳圓 十八錢料) 全壹冊五百餘頁

將軍と夫人の傳記及逸話の数々を詳細に説ける有益なる好讀物。今や各地方の大歓迎を受けて増進した増進の盛況をなしつつある良書なり。

◆慈尾知治氏新著◆

少年平家物語

(四六判最上製美本 正價金貳圓 十八錢料) 全壹冊三百頁

平家物語を青少年の趣味の讀ものたらしめんと著者が苦心になりし最も良書なるもの、一讀して一讀を添ふ。

◆佐藤種治氏新著◆

参考日本歴史精説

(菊判最上製美本 正價金六圓八拾錢 廿七錢料) 全壹冊八百餘頁

本書は國史を教育する人々と國史の各種試験に應ずる研究者の参考と供せんが爲に編纂せるものである。内容は中等學校教授書目に準據して太古より現代までの史實を探究考證し其上諸種の史籍を参照し其缺を補ひ且つ趣味ある材料を加へ何人にも讀み易く了解し易き事を考慮して詳細に叙述せるものである。殊に明治天皇大正天皇今上天皇陛下の御遺徳を慶祝し奉り祝祭日に於ける講話の参考と供する等大に宜を用ゐたる新編の史書である。文檢受驗者高等專門學校入學受驗の準備として必讀のものである。

◆西臺來太郎氏新著◆

讀中等東洋史詳解

(四六判最上製美本 正價金貳圓 十八錢料) 全壹冊四百頁

東洋史研究用の参考書として略記に便する書で本書に越えたるものは未だ見ない。史實も内容も豊富で文檢試験の問題も織込んであり受験研究者が教科書代りの研究の嚆矢として最良の書である。

((録目書圖行發館同大))

◇新屋敷幸繁氏新著◇

現代文學の鑑賞

(四六判最上製美本 正價金壹圓八拾錢 送料十二錢) 全壹册四百餘頁

本書は著者獨特の論と實際と詩人的熱とをもつて現代文學鑑賞の態度方法を描き出した生きたる鑑賞讀本である文學志望者文學研究者及文檢受験者國語科教授者等にはこの方面唯一の参考書也。

◇新屋敷幸繁氏新著◇

現代詩の理論と評釋

(四六判最上製美本 正價金壹圓八拾錢 送料十二錢) 全壹册四百餘頁

自由詩のためにすばらしい氣焔をあげた詩作研究書。前篇では日本の詩は自由詩より外に行く道がないから詩人はこれを押し進めると云ふ旗幟を押したて、堂々現代の詩道を論じ、詩制作の機微を開明して残す所が

ない。後篇では大正詩人五十家の代表作について其創作態度を解明し盡して詩解の軌跡を開いてある詩作者は勿論、詩研究家詩教授者外現代詩を知らんとする者の先づ見なければならぬ良書である。御愛顧を希ふ。

◇森山右一氏編著◇

現代作文の模範と練習

(四六判最上製美本 正價金貳圓 送料十八錢) 全壹册四百餘頁

突如!! 善星の如く作文界の名著現る。實に本書は第一線に立つ現代的文章の模範と作法を系統的に明示せる時代向の良書たり。「自然描寫」「動物描寫」「人物描寫」以下十三種類の文章を更に七十三の「場合」「場合」に印象分類しその一々に互りて「作法」「文法」「練習題」を提出し頗る科學的懇切を極めたり。弘く中・女校、師範學校上級生並に作文教授者諸氏、受験者各位よ目下混沌たる作文界に出現したるこの善星的名著を見落さるゝこと勿れ。

書良き可ふ備を本一非是に校學小

▲教授用と檢定受験用とを兼備せる隨一の國史參考書▼

國學院大學 講 師文學士 岡部精一氏 高橋與惣氏共著

五十版 文部省檢定 大日本歴史 試験問題對照

菊判クローリス製最上美本 紙數九百五拾頁 全壹册 金七圓五拾錢 郵稅卅六錢

本書は各種學校の國史料教授の參考に供し兼て各種の受験準備に資せんが爲めに編纂せるものにして教授參考に供する方法としては現行文部省の中等學校及小學校の教授細目を基礎とし之れを適宜配合して編纂を分ち國史の本幹を形成せる事實を精細に通説し又古今史學家の發表せし新説の穩健なるものは努めて之れを採録せり。試験準備に資する方法としては第一回より第廿六回に至る文檢試験問題を發題者の要求を推究探尋して一々精密に解釋し盡く各章末に添附せり。加ふるに編者多年の經驗と研究とを以て些の遺漏なきを期したれば諸學校に取りては簡便適宜あらゆる重要史實を網羅して餘蘊なき最も完備せる國史參考書たるべく檢定受験者殊に小學校教員諸氏に取りては教授用と受験準備用とを兼備せる斯學隨一の羅針盤たるべし。

發行所

東京市神田區西小川町二ノ三 振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

((大館發行圖書目錄))

書に分ち詳解し附録として漢語句を詳解し索引を以て應用せしめ辭典ともなるべき有益なる良書である白文の練習も出来るし文藝受驗者にとつては必讀書である

◇小林好日氏新著◇
参考増鏡新釋

(菊判最上製美本 紙數六百餘頁) 正價金四圓五拾錢 (送料金十八錢)
本書の特色は本文檢定の正確と語義解釋の精細と現代語譯の巧妙と評論の明快適切である他の追隨を許さざる良書懇切丁寧を極めた詳釋書文檢受驗者の絶好の参考書として好適なり

◇龍澤良芳氏新著◇
参考大鏡新釋

(菊判最上製美本 紙數五百餘頁) 正價金參圓八拾錢 (送料金十八錢)
大鏡の詳解も數多いが本文と語譯と通解との三つを兼ねて行き届いた組織に成るものは無い本書はその三つを來の缺點を補ふと同時に年表原圖を添へて説明に餘蘊なきを期したものである文檢受驗者國文研究者の絶好の参考書である

◇小松 尚氏新著◇
参考徒然草新釋

(菊判最上製 紙數四百頁) 正價金參圓五拾錢 (送料金十八錢)

愛好法師の隨筆である本書は原作者の識見と世態に對する諷刺が篇中に内蘊して感銘自ら貫通せるものがある著者が之が詳解に當りて原意に背反せぬやうに對する私見を述べたは國文學の研究資料として尤も適當な書である文檢受驗者の好指針たる良書である

◇龍澤良芳氏新著◇
文檢用源氏物語新釋

(菊判最上製美本 全冊八百餘頁) 正價金六圓八拾錢 (送料金十八錢)
本書は文檢受驗者國文研究者の入門手引書として出來たものである内容は何人にも分り易からしむる様に努め即ち大體の語彙より須磨石まても各帖毎に小節に分ちその梗概を添へたる等理想的に通解を施し尙五拾四帖全部の檢受驗者の源氏入門に無二の手引草である

◇石川 誠氏新著◇
源氏宇治十帖新釋

(菊判最上製美本 全冊四百頁) 正價金參圓五拾錢 (送料金十八錢)
王朝時代の物語で最も現代人の共鳴を得るものは源氏と宇治十帖は近代的な點に於て最も感興を惹くべき部分である文檢受驗者には眞に唯一の参考書である其他國文研究者にすゝむ

((大館發行圖書目錄))

◇文學博士 吉野義則監修・奥里將建著◇
最新國文學史辭典

(菊判最上製美本 全冊五百頁) 正價金參圓五拾錢 (送料金十八錢)
(大阪毎日新聞批評) 作者の傳記製作の事情その他文學史と密接な交渉を有する諸事項に關する考査を五十餘頁に網羅排列表して國文學研究の完全を期したもので國文學の評論史傳に興味を持つ人々の座右の寶典である附録として歌人國學者俳人儒者等の系譜及詳細な國文學史年表を附せる書である

◇文學博士 吉澤義則・奥里將建著◇
唯萬葉長歌全集

(菊判最上製美本 全冊五百餘頁) 正價金參圓八拾錢 (送料金十八錢)
長歌の全部を口譯し古來の凡ゆる異訓異説を列擧する等短歌の註を盡したのが本書である反歌の口譯があるから一般の人士には對期的な手引であり附録に長歌のみが出題される文檢の受驗者には絶好の答案式捷徑準備書である

◇兄玉尊臣氏著◇
和歌の作法

(四六判最上製美本 正價金貳圓 送料五錢)

◇吉村重徳氏註釋◇
義太夫作淨瑠璃註釋

(四六判最上製美本 全冊三百三十頁) 正價金貳圓 (送料金十八錢)

本書は先づ和歌史の概要を知らさんが爲に第一に日本和歌小史を述べ次に古來よりの著名な歌學書を平に現易代語を以て解釋し最後に現代大家の名歌を歌類別に配し趣味のうちに作歌の眞髓を會得せしめんとする和歌道の手引草なり

○假名手本忠臣藏 三篇
○義經千本櫻 三篇

芝居淨瑠璃の全部を知り得る外難解の語句も忽ち水解決し其の味も一層深くなることと思ふ文學研究者義太夫演劇等に愛好者の一讀をおすゝめする

◇小林榮子女史校訂◇
近松時代淨瑠璃集成

(四六判最上製美本 全冊壹千二百頁) 正價金五圓八拾錢 (送料金廿七錢)
本書内容は會我會稽山・吉野都女楠・狐山姥・信州川中島合戦・平家女護島・本朝三國誌・傾城酒香童子・國姓爺合戦・雙生隔田川・傾城反魂香・出世景清・等近松が時代物の傑作中の傑作廿篇を詳密に校訂せる一般人士の趣味の讀物たらしめし良書なり

（大 同 館 發 行 圖 書 目 録）

◇文學博士 宇野哲人氏新著◇

支那哲學史講話

（菊判最上製美本 全壹册五百餘頁 正價金貳圓八拾錢 送料十八錢）

本書は上古より清末に至る迄の支那思想の概要を極めて平易に簡明に敘述して最もよく要領を盡くせるものなり特に清朝に於ける學術思想の變遷が如何に暗々裡に革命を惹起するに至りしか支那の新人の思想は如何なる傾向を帯びるか著者の最も留意せる所に於て從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依て補足せられて亦遺憾なし。本書は又附録として一々原文を掲げて直ちに堂奥を窺ふの便に併し亦著者の議論の根據あるを知らしむ。要するに初學者にも専門家にも座右に缺くべからざる絶好の名著なり。

◇文學博士 紀平正美氏新著◇

自我論

（四六判最上製美本 全壹册五百餘頁 正價金貳圓參拾錢 送料十八錢）

本書自我論一編は全く自分の觀念論の上に立脚して組織したるものである従て缺點も多からうと思ふが同時に又自分のものであるとの自信をも有つて居るのである

る前編「自我の分析」に於ては出來得る限りの分析を試みた後編人格の價值に於ては人格の意義と價值とを論理的に定めんと企てた。

◇文學博士 紀平正美氏新著◇

改訂人格の力

（四六判最上製美本 全壹册三百頁 正價金壹圓八拾錢 送料十二錢）

本書は先に一度出版せられしものを「自我論」の出來たと同時に讀者の要求により著者が全部新しく改訂して發表せられしものである「自我論」を讀まれし人も又これから入つて「自我論」を讀まれる人も必ず併讀せねばならぬ重要な姉妹篇である。

◇文學士 吉村勝治氏新著◇

近世界政治外交史論

（大坂朝日新聞批評）：佛蘭西革命以來最近の世界戦争を経てロカルノ會議に至るまでの世界各國の政局と國際關係の變遷を概説した書である敘述の文章流麗にして活氣があり併し多くの事件の要點をつかんで其經過並に結果を明快に解説した近來の好著なり。

◇石川 誠氏新著◇

東京神田 大同館發行

五 版 萬葉集古今集選釋

四六判最上製本 全壹册五百餘頁 貳圓八拾錢 送料十八錢

（和歌入門者の必讀書）

本書は古來歌人の金科玉條として於てきた萬葉集・古今集・新古今集三部の中から雅馴流麗の數百首を抜萃して評釋を試みたものである。主として文檢受驗者諸君・各種學校受驗者・學生諸君及び和歌初學者の便を計り懇切丁寧に註解を施したものである。猶三歌集の詳密なる解題和歌史概要及三歌集參考書の解説を添へたものである。されば本書一巻で和歌史中の太古から現代に至る各時代の作例數百首を通觀し得る正に歴代和歌集を兼ねたものと云ふべき書なり。

◇文學士 小林好日氏新著◇（文檢受驗者必讀の要書）

四 版 新體國語法精説

菊判最上製本 全壹册四百頁 貳圓八拾錢 送料十八錢

本書は最も進歩したる科學的方法の下に試みられたるわが現代語の研究書であり文語から口語に至る歴史的變遷を顧みられた比較對照法である音韻論品詞論から文章法論に至るまで懇切周到なる説明を施したもので國語の記述的・心理的・理論的・文法的である。本書は又半面から見れば標準語の研究書であり標準語問題の理論的研究である。殊に心理的・初等中等を問はず國語教授に供はるもの必ず座右に備ふべき参考書なり。

甲斐 一二著 文檢用 **新教育說撮要** 四六判 (新刊) 正價金貳圓 送料十二錢

本書は最近東西洋新教育説の要點を簡明に叙述し説明し批判せるものである。常に文檢受験者のみならず教育上の新學説の研究に志ある人に取りては實に唯一無二の好資料たる良書である。

渡部政盛監修 文檢用 **教授學習法講義** 最上判 (再版) 正價金五圓 送料廿八錢

文檢に於ては近頃學習に關する問題や學習本位の教授法の問題が頻りに出る而もこれに十分應答し得るものはない。本書は之等教授法研究者の爲めに叙述せるものであつて内容は平易明快要領よく而も受験の立場から見ても一も忽せにすべし。

三浦 藤作者 **國民道德要領講義** 最上判 (再版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

三浦 藤作者 **教育大意講義** 附 教育史 最上判 (再版) 正價金參圓 送料十八錢

本書は文檢受者又は教育學倫理學研究者のために執筆せるものである。特色とする所は(一)最新の思潮と研究の結果とを汲みたる事(二)最も組織的系統的に叙述したる事(三)文章が極めて平易流暢たる事等である。國民道德・教育大意の教科書としても参考書としても絶好の良書なることを斷言す。

渡部 政盛著 **文檢** (日本) **教育史** 最上判 (八版) 金六圓八拾錢 送料廿七錢

本書は日本東洋西洋とも古代より現今に至るまでの史實を全部網羅したるもので内容は系統的にして簡明瞭ならん事に努めたる外文檢受者に取りて唯一の教育史研究用書である。本書一冊で十分合格し得る事云ふまでもなし。

中澤美治著 **活動寫眞と教育** 最上判 (新刊) 正價金貳圓 送料十二錢

本書は活動寫眞と教育との關係について其相互の根本的價值應用から學校教育社會教育上の實際的方策等に亘り具體的に詳細に論述したるもので教育者及讀者必讀の良書なり。

中村古峽著 **變態心理の研究** 最上判 (九版) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

本書は變態心理を飽くまで學術的に且つ通俗的に説明したる我學界唯一の新著にして特に世上の山師が心靈を名として諸種の關着手段を行へることを素破抜きたる一章は最も痛快を極む。

羽太銳治著 **性慾教育の研究** 最上判 (拾參版) 正價金參圓 送料十八錢

本書の内容目次を掲げれば：少年に性的知識の開發を必要とする理由：性慾教育の當事者：性慾教育の範圍並に方法：兩性に分る原因：性的機關と性慾：生殖器の構造及異常：男子生殖器：女子生殖器：兒童の性的特質：性的現象：病的性的現象：等項目を分ちて詳細に叙述せるものである。

宮本幸惠著 **行詰つた現代の圖書教育** 最上判 (新刊) 金貳圓參拾錢 送料十八錢

現代の圖書教育の現實と理想とを詳細に考察し解決して兩者の折衷即ち現實的理想主義を提唱したものである。圖書教育に従事する人の必讀書である。著者は美術學校出で實際教育に従事せる新進の學者である。

宮本幸惠著 **彩色の研究と其取扱法** 最上判 (五版) 金參圓八拾錢 送料十八錢

美麗なる石版廿五度刷の色圖十六葉。調和表實驗圖解は如何なる案人と雖も一見して彩色のグラママーを會得し衣食住或は眞善美の各方面に容易く結着ける事が出来る。大好評を博して各方面に歡迎せるものである。

小林 好日著 **新體國語法精説** 最上製 (四版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

本書は一名標準語法精説と云ふ文檢受驗者が日本文法研究上必要缺くべからざる参考書である内容は最も進歩したる科學的方法の下に試みられた我現代語の研究書であり文語から口語に至る歴史的變遷を顧みられた比較對照語法である。天下の標準語問題を取扱つたものゝ少い今日に於て國語問題に思を潜める者は必ず一通讀しなければならぬ。

吉波 彦著作 **漢文(白文訓讀)復文(支那時文)研究要訣** 最上製 (三版) 正價金參圓 送料十八錢

文檢國語漢文科受驗の秘鍵を握つて一躍難關通過の榮冠を獲んとするの諸彦は先づ本書を看よ。本書は著者が多年の經驗と豊富なる材料とを以て新に受驗者に提供せる他に絶對に類書のない要訣である。第一篇は白文訓讀を第二篇には復文(支那時文)を第三篇は支那時文を解釋したる國漢文受驗者には最新の捷徑である。

植松 安著 **改訂古事記新釋** 最上製 (拾六版) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書き下し振假名を附し詳細なる語義と其索引を添ふ。著者が國民心理を基礎として神代と上古との風俗人情に下したる評論的文章は各段章に顯はれ大和民族發展の由來を明にし國民歸郷の中心を開く是れ本書の特長なり世界の日本我等の日本これをこの書に得よ。

植松 安著 **紀記の歌の新釋** 最上製 (三版) 正價金貳圓 送料十八錢

古典の國民化これは私の大に望む所であつて先に「古事記新釋」を著けたか今又こゝに紀の歌のみに就いて書いて見た。古事記は文學日本書紀は歴史といふ著者の見方である本書にはもとより新論とては無いが只現代の一般人士が讀むには便宜であると思ふ。

吉波 彦著作 **精要韓非子詳解** 最上製 (第貳版) 金四圓八拾錢 送料十八錢

本書は韓非子の全巻中より名篇雄草廿五篇を選釋し之に篇旨・訓讀・語釋・通解・評釋の五段に分ち每節詳密叮嚀に著者が其蘊蓄を傾註して韓非子の精髓を闡明したものである文檢受驗者・高等學校各種專門學校生徒の参考書として唯一無二の好著である。

字野 哲人著 **四書講義大學** 最上製 (貳拾版) 金貳圓參拾錢 送料十八錢

字野 哲人著 **四書講義中庸** 最上製 (貳拾版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

儒教の目的は大學に備はり、儒教の根本義は中庸に明かである。かくて學府の二書は經となり緯となり。互に相待つて儒教の眞相を傳ふ。著者は如上の見解を以て先に大學講義を著はし今亦中庸講義を著はす。大學に由て既に儒教の目的を明かにせる大方の士は謂ふ更に中庸に就いて儒教哲理の眞面目を了せよ。

森山 右一著 **文檢用史記選釋** 最上製 (第貳版) 金參圓五拾錢 送料十八錢

本書は著者が積年苦心の體驗により史記百三十卷中より壹百の名篇佳章を厳選し先賢諸名家の長を採りて詳解を下せる名著也史記研究入門の書は本書を於いて他になし。有益の参考書也。

龍澤 良芳著 **文檢用左傳選釋** 最上製 (第貳版) 金參圓八拾錢 送料十八錢

支那古典中最も難解を的て目せられる左傳は文檢受驗の際の必讀書である本書内容は讀方講義解參考の四欄に分ちて丁寧親切に叙述せる文檢受驗には本書一冊で他に必要なしと言ふまでにした他に絶對に類書の無い好參考書也。

野村 隈畔著 **ベルクソンと現代思潮**

四六判 (九版) 金貳圓五拾錢
最上製 送料十二錢

本書はベルクソンの思想を中心として現代の哲學及生活の梗概を述べたものであるだけに獨りベルクソン哲學の特色と價值とを學び得るのみならず弘く哲學的思想を解する上に於ても亦妙なからざる價值がある。

島 爲男氏著 **ベルクソン哲學と現代教育**

四六判 (最新刊) 正價金貳圓
最上製 送料十二錢

ベルクソンは今尚新しい哲學的生命の源泉である近時ベルクソンは哲學者のみならず心理學者・教育學者の研究者の注意の焦點とならうとしてゐるのは理由ある事である實にベルクソンは階級主義の別働隊にして今後大に私共によつて研究せられねばならぬ、實庫でなければならぬ。

稻毛 詛風著 **オイケンの哲學**

四六判 (十三版) 金壹圓六拾錢
最上製 送料十二錢

オイケンは現代思想界の明星也從つて苟くも思想界に關し精神事業に従事する者にして彼を知らぬ人は未だ到底哲學界宗教道德教育文明歴史乃至生活を論ずる資格なし 現代生命に觸れ生き甲斐ある生活を生きんとする者は本書を讀め。

大關増次郎著 **カント哲學批判**

四六判 (五版) 正價金貳圓
最上製 送料十二錢

大關増次郎著 **カント 研究**

菊判 (三版) 金七圓八拾錢
最上製 送料卅六錢

哲學研究者がカントへの難一の手引書。近代思想のことごとくが或はカントを批判し或はカントを組織しないものは無いのであるから近代思想を極めるものは必ずカントまでさかのぼらなければならぬ。本書はその手引書である。

仲原善忠著

理法日本地理原論及細説

菊判 (三版) 金四圓八拾錢
最上製 送料廿七錢

今までの地理學教授は可成無味乾燥なもので地理學それ自身のもつ興味は大なるにもかゝらず學生の心は餘りそれに向けられてゐなかつた本書は全然新しい試みをなしたもので我國を一の單位として地形氣候産業都市等の各項を特色づけて叙述してゐる人と地に關する因果關係等を明かにし學生の自發的研究心と興味とを刺戟する事につとめてゐる誠に産業の部を繕いてみるとわれわれは我國の産業の概略農村疲弊の因農村問題の起因等まで知ることが出来る新方面を開かうとする著者の努力は尊い。——(東京日々新聞批評)——

三村信男著 **地理學通論 地文學の部**

菊判 (四版) 金六圓八拾錢
最上製 送料廿七錢

三村信男著 **地理學通論 人文學の部**

菊判 (四版) 金六圓八拾錢
最上製 送料廿七錢

地理學は其の範圍頗る廣く之が研究に多大の不便と苦痛を感ずるものであるしかして其の理由の一として兼合されたる地理學の良書のない事であるが著者はこゝに思ふ所ありて各種學校の地理教授者には勿論文檢受験者の爲に僅の努力にて多大の習得を目的として最新の學說に基述されたのが即ち本書である本書は地文及人文地理事項を網大漏さず之を詳細し百數十個の挿畫によりて内容を明かにし且つ終りには詳細なる索引を附し之を利用する時は本書は實に地理學の寶典となるものである。

栗原寅治郎著 **日本産業地理精説**

菊判 (五版) 正價金四圓
最上製 送料十八錢

本書は我國の重要産業に就て古來發達の過程を明かにし内地及新領土に於ける新業伸張の現勢を詳述し最新の材料に基きて記述平易懇切を極め誠に時局に適する良書たるを確信す。

【書叢傳史年少・版出館同大】

宮崎 久松著 ▼少年古事記物語(三版) 金壹圓十八拾錢 送料八錢	大久保 龍著 ▼少年源賴光と四天王(大江山退治)(好評) 金貳圓十五拾錢 送料八錢	守屋 貫秀著 ▼少年九郎判官義經上卷(三版) 金貳圓十五拾錢 送料八錢	守屋 貫秀著 ▼少年九郎判官義經下卷(再版) 正價金貳圓 送料十二錢	守屋 貫秀著 ▼少年曾我物語(四版) 金壹圓八拾錢 送料十二錢	守屋 貫秀著 ▼少年源氏三代北條九代記(好評) 正價金貳圓 送料十八錢	松本 浩記者 ▼少年木下藤吉郎(新刊) 正價金貳圓 送料十八錢	松本 浩記者 ▼少年豊臣太閤(新刊) 正價金貳圓 送料十八錢	宮崎 久松著 ▼少年切支丹と天草の亂(新刊) 正價金貳圓 送料十八錢	奈良島知堂著 ▼少年加藤清正(三版) 正價金貳圓 送料十八錢	奈良島知堂著 ▼少年井伊大老附櫻田門事變(新刊) 正價金貳圓 送料十八錢	奈良島知堂著 ▼少年忠臣藏(三版) 正價金貳圓 送料十八錢	松本 浩記者 ▼少年吉田松陰傳(三版) 正價金貳圓 送料十八錢
---	--	--	---	--	--	--	---	---	---	---	--	--

東市東區 大館發行 座口金貯替振
番貳七八京東 區田神市東東 三ノ二町川小西



